

# 東京マラソン物語

水鳥翔

見上げれば、いつ降ってもおかしくない曇り空を突き刺すように、新宿新都心の超高層ビルが聳え立っている。その中でもひととき威厳に満ちた都庁の東側の道路上で私はスタートを待っている。それにしてもすごい数の人だ。寒さを凌ごうとする意識からか距離を縮めて互いの体温で暖をとりながら、ランニングウェアだけの身体をこまめに動かしている。近すぎて逆にためらうのか無言のままだ。

MCがスタートブロックへの整列完了時間が来たことを告げ、しばらくするとセレモニーが始まった。君が代斉唱、河野洋平大会会長挨拶のあと、石原都知事が挨拶に立った。「天気は曇りで寒い日になりましたが、晴れて気温が高くなるとランナーの皆さんの中には体調を崩す人も出てきます。とにかく私は皆さんに生きて帰ってきてほしい。ちようどいい天候は用意しました。あとは皆さんに、苦しさを耐え抜いた人生の充足感を味わっていただだけです。」笑い声と「オー」という声が響いた。知事の言葉はどんなよりとした雰囲気を一変した。沈黙して寒空に震えてきたランナーの間に会話が聞こえ始めた。

カウントダウンが始まり、スタートの合図が響いた。一斉にストップウォッチが動き出す。スタート地点で河野会長と石原知事が手を振ってランナーを送り出していた。誰かが「知事ありがとう」と叫んだら、「ありがとう」が木霊した。

首都東京を晴れの舞台にマラソンを走るには数多くの困難が伴う。特に交通規制だ。沿道の商店街や企業活動にも影響する。しかも普通のマラソン大会なら五時間の制限時間を七時間にするという。警視庁がGOサインを出すはずがない。石原知事は警視庁幹部を連れて、ニューヨークシティマラソンを視察に行き、マラソン警備の実態と市民参加による大規模マラソンの意義と価値を示すことで、幹部に理解を求めた。その後、警視庁と企画スタッフの連携で、規制のデメリットを最小限にするよう、地下鉄路線図をなぞりながら、立体交差があり歩道橋もある道路を探し、しかも観光名所を巡って行くコースを決めた。

「知事ありがとう」には数々の困難な壁を乗り越えて、このハレ舞台をランナーたちに用意してくれた立役者への感謝が込められている。

新宿を抜けて靖国通りを走っていると、防衛省前に来た。正門前で海上自衛隊東京音

楽隊が、映画「ロッキー」のテーマを演奏している。こうした応援が「東京大マラソン祭り」としてコースの沿道二八か所で行われている。皇居付近ではチアダンスの応援が見える。内堀通りに入って、皇居外苑では皇居警察音楽隊による演奏応援だ。

日比谷通りに入って、日比谷公園を横目に過ぎ、西新橋の交差点に近づいたあたりで、すでに品川で折り返して反対側車線を北へ向かっている先頭集団とすれ違う。こうして一流選手の走りを見ることがするのも醍醐味の一つだ。

一五キロ付近に給水所があり、スポーツドリンクを手にした。給水所は全部で一五か所。そのうちハーフを過ぎた四か所では食べ物も用意している。この給水所で活躍しているのが一万人を超えるボランティアだ。こうした人々との温かいふれあいも楽しみの一つだ。

品川で折り返して日比谷通りを北上し続け、日比谷交差点を右折した辺りで中間点に到達した。数寄屋橋交差点の人垣から寄せられる声援に耳を傾けながら、沿道寄りに進路をとった。前日「どこで応援しようか」と問う妻に、「買い物がてら銀座にでもいたらどう？」と答えたので、一応探してみようと思ったからだ。

銀座四丁目の交差点に近づいて、(この辺りにいるのでは)という予感が働いた。その瞬間に妻を見つけた。難しい顔をして懸命に探している顔が満面の笑顔に変わった。その笑顔が初めて知り合った小学五年生の頃の表情そのままに思えたのは、疲れがかなり出てきたせいなのだろうか。現象としては一瞬のふれあいだが、その積み重ねが永遠のふれあいの今を作っている。

交差点を左折し中央通りに入る。さすが銀座だ。圧倒的に女性が多い。交差点付近は若い人が多いように思える。芸能人を探している表情にしか見えないのはオヤジの僻みだろうか。

沿道から食べ物差し出してくれる人がいる。チョコレートや飴、クッキーもある。「取ってください」という声の方を向くと、とても美味しそうなプチロールケーキがお盆に載っている。せっかくなのでいただくことにした。ほどなく給水所が見えてきた。ドリンク類に加えてバナナ、アンパンもある。ついついどちらにも手を出す。

日本橋を通り過ぎ、人形町でのフラダンス応援を「ふらふらダンス」状態で横目にしながら、江戸通りをしばらく走ると浅草雷門が真正面に見えてきた。その雷門前で右折し吾妻橋方面に向かう。折り返し地点となる吾妻橋手前の交差点では、沿道の人に頼んで東京スカイツリーをバックに写真を撮ってもらっているランナーがいる。(真剣に走

れ！）とぼやくものの、カメラがないことを悔やむ。

スピードはガクンと落ちた。黒いスーツに革靴姿。おまけに鞆まで手に提げてサラリーマンという襷を掛けた男が何人も追い越して行った。そのたびに沿道から「サラリーマン頑張れ！」という声が掛かる。「パンダ頑張れ！」も何度も聞こえてくる。おそらく後方をパンダが同じようなペースで走っているのだろう。

他にも着ぐるみや仮装をしたランナーがたくさんいる。女性でもかなり大胆な仮装があつて、周りの男性を楽しませている。大きく手を挙げて横走りしたりしながら「来週結婚します！」と叫んでいる者もいる。沿道からは「おめでとう」の嵐だ。みんな沿道との一体感を作りたいのだろう。「婚活中」と書いた紙きれを背中に貼った男は何の愛想もなく黙々と走っている。（あれでは見つからないだろうな）と思う。

三二キロ地点の給水所に着いた。ボランテアの声に誘われて、カットされたバナナを二個口に入れ、アンパンとレーズンを手にした。さらに行くに沿道からイチゴを入れた箱を差し出す人がいたので、これもいただいた。

水天宮前を過ぎ、日本橋、銀座へと戻ってきた。晴海通りに出て築地市場のある交差点を左折すると、やつと三五キロ地点が見えてきた。この辺りから高架の道路へと急激に上っていく。ここに来ての登りはきつい。さらにペースは落ちたが歩いてはいない。朦朧とした意識の中で、ふと銀座で見た小学生の頃の笑顔を思い出した。やはり苦しいときに救ってくれるのは妻かと殊勝なことを思いながら、上り下りを繰り返している。

晴海橋を渡った辺りからストリートダンス、ジャズバンド演奏、合唱などでの応援が賑やかだ。さすがに力の入れどころを知っている。こんな場所でも沿道の人が絶えないのにも驚く。三八キロ地点を超えた。こんなに遅いが歩いている人は追い越す。その機会が多くなってきた。

目標タイムを失い「歩きの誘惑」が湧き起こってくる。そこに力強い和太鼓が響いてきた。声援も熱を帯びている。あの笑顔と相まって、もう一度走り続ける意識を鼓舞した。ゴール付近もイベントが行われているが、もう目に入らない。残り二〇〇メートルを切ってダッシュした。ゴール前のタイム表示は四時間三九分を示していた。過去最低の記録だが、とにかく最後まで走った。

これは東京マラソンという舞台で展開された私自身の小さな物語だ。ランナーの中には東日本大震災で被災し身内を亡くされた方もいるという。その人の物語はどんなだっ

たのだろう。結婚を目前にしたランナー、社員に範を示そうと自ら率先してボランティアになった社長、仲間の名前のプラカードを持ってひたすら待ち続ける沿道の人。それに物語がある。

イデオロギーを中心とした「大きな物語は終焉した」と言われて久しい。人々をつないできた集団や組織の枠組みが緩やかになって、個人が析出され自由度を増しながらも孤立を深めていく。そうした時代背景の中で高度情報化が進展し、人々をつなぐ新しい仕組みが生まれてくる。個人の中で眠っていた小さな物語を情報として仕組みの中に投げ込んで、緩やかで自由度の高いつながりを求めるようになってきた。そのつながりをもう少し関係性の深いものしようというのがソーシャルネットワークだろう。

東京マラソンというイベントもこのソーシャルネットワークに似ている。東京マラソンという共通テーマで作られたネットワークの中に、参加したい人たちがつながりを求めて集まってくる。喜怒哀楽を共にするような深いつながりを求める人もいれば、「頑張れ・ありがとう」のつながりを求める人もいる。緩やかだが確かに支え合っているという実感が持てる場。それが東京マラソンという舞台なのだ。

しかし、東京マラソンはこの舞台に参加する「友達」関係のネットワークだけでは成り立たない。ここ東京でその場を実現するためには、どこまでも広がる不特定多数の人々の協力が不可欠で、そのため誰もがその場を共有できて楽しめる仕掛けも必要なのだ。一万人のボランティアと東京大マラソン祭りによる応援はそうした仕掛けの一つだろう。

今回の東京マラソンのタイトルは、「東京がひとつになる日。東京マラソン2012」だ。「東京がひとつになる日。」の「。」はこれが一つの文章であることを表現しているのだろう。つまりは「東京がひとつになる日」というテーマの物語だということだ。東京マラソンという舞台で展開される物語の数々を、東京という場所全体で分かち合うことによって、さらに新しい物語が生まれていく。そのつながりによって東京全体がひとつになるような一日を作りたい。そんな思いでできたのが「東京がひとつになる日。」という物語なのではないかと思う。